

アルカイックネメシス

超次元脳トレ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

知らない少女に異世界へと飛ばされた変人はなんやかんやで生き残る。

第1話

目
失礼御免

次

第1話 失礼御免

真つ逆さまに落ちている。

俺以外にも何千、何万もの人が理解の追いつかないまま落ちている。

学生服の野郎共や眼鏡をかけたいかにも社会人っぽいオツサン。噂話の好きそうなおばちゃんに……おいおい、あれって俺が普通つてた幼稚園じやねーか。ガキ共と先生が建物ごと落下している。

ボーッと眺めると、俺の横を誰かが通り過ぎた。

綺麗な女だ。黒の長髪と鷺のような鋭い目つき、他人を見下しているのがすぐにわかる雰囲気をしている。

その女は手の平を上……俺達の方に向け、横に振り払った。

それと同時に黒く発光する玉が女の背後で無数に現れ、四方八方へ散っていく。

これは、なにか不味い。

不味い事態が起きている。わからないが、そんな気がする。

だが、跪もがけども俺になにか出来る筈もなく、目前にまで迫った黒い玉に為す術もな
く俺は——

気づけば、林の中に立っていた。

……それで？

それで、俺は……いや、ここは何処だ？ どういう事だ。何なんだ、いつたい。

「あの……」

その背後からの声に、俺は反射的に距離を取つた。前の職業柄、こうした咄嗟の判断で窮地を脱した事が何回かあつたせいか、距離を取るのが癖になつてゐる。

早く治さねばなとは思うがしかし、今は目下の問題を解決するべきだ。

そう、この女がまず誰なのかを知らなければ。

「ああ、すいません。驚かれました？ 自分の癖みたいなものなんで、気にしないでください。それより、貴方は？」

突然の奇行に目を丸くしていた女に、勤めて優しく接つする。笑顔も添えよう。

なんて模範的な社会人なんだ。

だが、二十歳後半くらいの、同年代に見える年齢の女は俺のパーエクトな挨拶などもうどうでもいいようで、頻りに辺りをキヨロキヨロしている。

おい。そつちから話しかけといて無視とはいい度胸だな。ええ？

と、言いたかつたが、結構綺麗な人だから言わないでおこう。

「そつちから話しかけといて無視とはいい度胸だな。ええ？」

言つてしまつた。

「え!? す、すいません」

「仕方ない、許してやろう」

我ながらなんて傲慢な奴なんだ俺は。まあ言つてしまつたものはしようがない。こんな事もあるさ。

前向きに考えよう、前向きに。

「それで、貴方は誰でしようか。失礼ですが、年齢と体重とバストサイズを教えてもらえますか?」

「いや本当に失礼ですね!?! 名前は兎も角体重とバ、バストサイズつて!」

「いえ、僕が知る女性の一人は大抵快く教えてくれるんで、流れで聞き出せるのかなと思いまして。……なんですかその顔は?」

まるで変人を見るかのような目に、俺は不快感を感じた。これだけ丁寧な口調で話しているのに、失礼な奴だ。

だが俺は大人。

相手が名前も年齢も体重もバストサイズも教えてくれない奴でも、声を荒げて非難するようなことはしない。

そして何より、ここが何処なのかが重要なのだ。こんな女に構っている暇は無かつた。

何か知つてるとも思えないしな。

失礼な奴だし。

俺はやれやれとため息を吐きながら鬱蒼とする林を進んだ。

「え？　え？　あの、ちょっと！　全部聞こえてるんですけど！　あのお！　つて、なんで今ため息吐いたんですか！　吐きたいのはこっちなんんですけど！　もうつ、待つてくださいーー」

ガサツ

聞こえてきた草の擦れる音に、俺は何か叫んでる女の口を手で押さえて地面に伏せる。

今度はなんだ？　知らない場所に居るわ、変な女が絡んでくるわ、もうお腹いっぱい

なんだが。

そんな俺の思いが通じたのか、出て来たのは知らない学生服を着た少年。いや、青年か？

中学三年生くらいに見える。

ただ、その青年は肩や脇腹に擦り傷などを負つていて、とても尋常じやない様子。この不審者を見るような目は、今にも俺に蹴りかかるほど迫力が……え？

気づけば視界一面に土が広がり、腹に鈍痛が走る今日この頃。

母ちゃん元気にしてつかなあ。

「お前っ！ 何やつてんだよ、こんな時に！ ただでさえ余裕がねえのにっ」

いやいや、いやいやいや。

何やつてんだよはこっちの台詞だわ。なに？ お前ら揃つて挨拶もまともに出来ないの？

それともアレか、若者の間では挨拶に蹴りを入れるのが流行つてゐるのかね。

「五月蠅え！ そこの人、早く逃げてください。じやないともう」

心の内を見透かされるだけでなく、女に自分心配してますよアピールをする余裕があるとは。こいつ、只者じやねえな。

と、思つたのは束の間。事態は予想を上回る危機であると、ソイツの腕を見た瞬間に悟つた。

腕。

五月蠅い女の腕でも、常識の無い青年の腕でもない。

草木をかき分ける為に伸ばしたのだろうその腕は青く、わに鰐の如き鱗を持つ爬虫類を思わせる。

これだけならばまだ良かつた。青い腕を持つワニやトカゲなど聞いた事もないが、まだわかる。

問題なのはその腕の高さ。

仰向けて下から見てもわかるその位置は、青年のだいたい百七十センチくらいの身長の、少し上にあるという異常。

時間が遅く感じる中、次に表したのは足。そして……頭。

あ、俺こいつ知つてる。

博物館とかでよく見るし、あれだ。えーっと、そう。

恐竜じやん。

今度は言葉は出なかつた。出た瞬間、俺が目を付けられそだつたから。

赤い鶏冠とりかんがチャーミングな青い恐竜は、品定めをするかのようにギョロギョロと丸い

目ん玉を青年、女、俺へと順番に見る。

あうあうあうあう

お、俺じやありませんように。俺全つ然美味しくないから、寧ろクソ不味いから。
 バレンタインでクラスの皆さんに渡しちゃった手前、俺だけ無いと不自然だからと
 嫌々渡された義理チヨコくらい苦い味だよ。あれ、砂糖と塩を間違えたのか少し塩辛い
 味だつたな。ほんとおつちよこちよいなんだからさー、ほんと。
 ……動けない。動搖する心をなんとか抑えようと巫山戯ふざけてみても、流石に無理があつ
 た。

ダメだ、落ち着け。まだ動くな俺。今一番不利なのは俺だ。青年はいつでも走れる状
 態、女は俺が蹴りで退かされた時にすぐ起き上がつてが今走れる体制じやない。
 だが希望が無い訳ではない。

この青い恐竜にある程度の知性があるのなら、一見苦しそうに寝転んでいる俺よりも、元気そうな獲物を優先する筈だ。そうに決まつてゐる。
 信じろ。信じろ信じろ信じろ。

そして、チャンスは來た。

女が恐怖に耐えきれなくなつたのか、一步、足が下がる。
 たつたの一歩。しかし、恐竜がそれを見逃すことはなかつた。

目線が三人から一人へと移り、身体の向きが女へと変わる。
よし来た！

俺から意識が外れただろうタイミングを見計らい、身体を一気に起き上がらせる。後
はもう、力いっぱい走るだけ。

「あ！」

フハハ、すまんね。一足先に抜けさせてもらうよ。可哀想とは思うが、そこはもう自
分の間抜けさとが、不運を恨んでくれ。

そんな若干ハイになつてゐる自分が一番の間抜けだったことは、すぐにわかつた。

青い恐竜の横を通り抜け、さあ逃げるぞと走り出した俺に追従する者が一、二、三、四。
そうだよな。別にあいつ一匹だけと決まつてゐるわけじやないよな。

ならやる事は決まつた。

俺は青年との方へ顔だけ振り返り、叫んだ。

「こいつらは俺が引きつける！　早く逃げろ！」

「ここぞとばかりに良いやつっぽい台詞を吐いて、俺は駆けた。二人とも待つてろよ。

必ず助けてやるからな！」

そして俺を助ける！



助けに来ねえ！

なんて奴らだ。人間じやねえ。

どれだけ時間が経ったのかわからないが、最初の地点よりも大分遠くまで走ったんじゃないだろうか。その間もあの青い恐竜達に襲われていたが、なんとか攻撃を受けずにいる。

幸いなのは、追いかけてくる奴が最初に見たアソツよりも小柄な恐竜だけってどことか。

「キヨエエエエエエエエ！」

……おかしいな。アソツ、さつき見た大柄な恐竜のような気がする。あれ？
まあ泣き言を言つても仕方がない。

こんな時もあるさ。

ほら、前向き前向き。ポジティティブさが俺の売りだろ？ 頑張れ。俺はやれば出来る子
だつてマミーも言つてたし。

前向き前向き。

前向き前向き。

「前向き前向きいいいいいいいい！」

けどさ、どんなに前向きで良い子でもさ、俺、人間だから。嫌な事されたらさ、やめ
ろよ！ つて、怒りたくなるじやん。

殴りたくなるじやん。

道端で走りながら拾った木の枝を怒りに任せて振ると、案外恐竜に効果あつたわ。近
くにいたやつの頭に偶然当たった。

「キヨエエエ！ キヨア！ キヨア！」

獲物だと思っていた相手からの手痛い反撃に怒り心頭のご様子。連携が得意な生物
なのか、もう囮まれてしまつた。

このままだと呆氣なく喰われてしまうだろう。
けど、妙なんだ。あれだけ走つて、しかもいつ死ぬかわからない逃走劇をしているのに、意外と体力に余裕がある。

気力も十分。

負ける気が、しない。

その原因はたぶん、俺の身体にまとわり付くこの黒い湯気みたいのがそうなんじやないかと、半ば確信を抱いている。

この黒い湯気が見えたのは、あの大柄な恐竜から逃げ出した数分後のこと。はつきり言つて、俺は逃げ切るのは無理だと諦めいていた。そりや当たり前だ。

前の職業柄多少は動けるものの、運動とは無縁の現代社会人の俺と、食うか食われるかの世界で生きているんだろうこの青い恐竜とでは、そもそも根本的な地力の差があり過ぎた。そして脅威はそれだけじゃない。

知らない地形、切迫した状況、馬鹿でかい蜂みたいな虫やその他の珍獣や猛獸。

ああ死ぬなって、思うのは当然だろう。

ところがだ。爪や噛み付きを避け、いくつもの死を搔い潜つていると、ふと、奇妙な靄もやが視界を掠めるのがわかつた。

その発生源を辿ると頭だつたり、腕や脚だつたりと感覚で伝わつてくる。その更に内

側、体内を探つていくと、ヘソより下のところに強い違和感を覚えた。

それを夢中になつて弄つていたら、いつの間にか黒い湯気が身体から出てて。つまり、そういうことだ。

なんか不思議な力がでてスゲーってこと。

「よつしや行くぞテメエら！ 覚悟しやがれ！」

戦いのゴングは、俺の掛け声で鳴らされた。

とは言うものの俺のやる事はいたつてシンプル。木の棒を適当に振り回すだけだ。

五対一で囮まれた今の現状ではいつ、どこから攻撃されてもおかしくない。だから牽制として、有り余る体力を使って近寄らせない。

さつきの反撃も牽制としての効果は増したはず。

これである程度は時間を稼げるが、まだ。これだけじやあ体力が尽きて喰われるだけ。ならどうするか。

敢えて、隙を作る。

近寄つて来ようとした小柄な青い恐竜を木の棒で追い払い、長く、息を吐いた。吸つて、吐いて、吸つて、吐いて。まるでもう疲れて一步も動けないかのように。

だが目だけは前三匹を捉えたまま離さない。

こうする事での獲物は疲れているが、まだ反撃してくるかも知れないと思わせる。

そしてこうも思うだろう。

後ろの二匹が俺を仕留めるチャンスだと。

ここで二択だ。後ろには大柄な恐竜と小柄な恐竜が一匹ずついる。たぶん、飛びかかるてくる。今までの動きでだいたいこう来るだらう事は予想済み。なら次はどつちが飛びかかって来る?

大柄か、小柄か。

それとも両方か。

こんな時、決まつて俺はこう選択する。

大柄だろ。

大きい男に、俺はなりたい。

遠心力をフルに生かした木の枝は、半回転を描き大柄な恐竜の頬を強かに打ち抜いた。空中で身動きの取れない体制、頭から地面に激突した恐竜の首は見事に折れ曲がっている。

まだ!

二十六歳独身の男が森の中、初めて本気の威嚇をする図がそこにあつた。